

マールブルクの特殊学校教員養成と ‘親の会’レーベンスヒルフェの人的連続性 —マールブルク大学医学部教授を中心として—

松本 瑞穂*

Key Words : ドイツ, 親の会, 知的障害, 特殊学校教員養成, マールブルク大学医学部

序

序 1. 本稿の目的

ドイツ知的障害 ‘親の会’¹⁾レーベンスヒルフェは、「古く権威主義的な戦後ドイツの特殊教育制度に立ち向かい、一石を投じた団体」と通説的に解されている。しかし、実際にはレーベンスヒルフェが1968年に全国組織化を達成し、爆発的に会員数を増やし、知的障害領域の本流を担うようになって以降も、西ドイツの施設数・特殊学校数は順調に伸びていき、レーベンスヒルフェ傘下の施設数・学校数も飛躍的に増加している。さらに、特殊学校整備・拡充路線へと特殊教育界が転換していく1960年代半ば²⁾、レーベンスヒルフェは定例研究会のテーマを「知的障害児の学校教育の促進」とし、同題の出版物の中で「知的障害児の受け皿としての学校」の重要性を指摘し、「障害児や親の多様なニーズに対応するために特殊学校のカリキュラムを充実させる」(Bach 1966) ことを主張していく。

創設者トム・ムッターズ (Tom Mutters 1917-) が構想していた「障害のある子どもとない子どもが一緒に教育を受けること」(拙稿 2006: p.45) からかくも離れ、レーベンスヒルフェが、特殊教育界の主導する特殊学校拡充政策、言わばセグリゲーション施策に何の反対も申し立てなかったのは何故か。表向きに語られているレーベンスヒルフェ像とは異なり、レーベンスヒルフェは特殊教育界と親和的であったのではないか。

以上のような問題関心から、筆者はこれまで、アーカイヴ(レーベンスヒルフェ・アーカイヴ、以下LA) 調査及びインタビュー等を通じて、レーベンスヒルフェの創設史及び組織機構の解明に従事してきた。その成果は2011年にひとまず完成を見た³⁾。そこでは、レーベンスヒルフェ

* 人間学部人間福祉学科

がその創設初期から大学教員（各州の特殊学校教員養成課程のリーダーでもある）を理事や委員として要職に抱え、また特殊学校を職員ごと傘下におさめていたことが明らかとなった。しかし、資料的・時間的な問題や筆者の能力的な制約もあり、具体的に、誰が、どうレーベンスヒルフェと繋がっていたかを全て書ききることはできず、分析の不十分さも残った。

本稿はこれらを埋めていく作業の、ごく一部に相当する。主に、レーベンスヒルフェの創設者集団・研究者委員会のメンバーと、マールブルク大学医学部・マールブルク大学特殊学校教員養成所の人的連続性に着目する。なお、先行研究の少なさや本稿テーマの性質上、拙稿の引用や再掲が多用される。故に、研究ノートの性格にとどまる。

ここで本論に入る前に、レーベンスヒルフェの概要を簡単に説明しておこう。

ドイツ知的障害「親の会」レーベンスヒルフェは1958年に、ヘッセン州マールブルクで創設され、1968年に全国組織化された。現在では知的障害児のみならず全ての世代の知的障害児者を対象とし、知的障害領域では国内最大の団体である。登記団体⁴⁾であるこの団体は、補助金という形で国家から法的な根拠を与えられ、施設運営から政策提言までもを含む多様な活動を行い、ドイツの知的障害領域において公私両面で多大な影響力を行使している。その活動はドイツ国内にとどまらず、国際的影響力を有する。会員数は13万5千人⁵⁾で、うち最も多いのは親で会員の約50%を占めるほか、専門職や有志、知的障害者本人もいる。活動内容は、入所施設・通所施設・余暇施設等の運営、作業所・授産施設の運営、知的障害者の親への相談援助など多岐にわたる。個人会員の寄付（1人当たり20～65ユーロ/年）を主財源とし、財源の50%以上を占めている（BVLH MGB 2008: S.64-65）。本部は、1958年の創設から2008年まではヘッセン州マールブルク（旧西ドイツ）に所在していたが、2009年以降、ベルリンへの段階的移転が進められている。

では、続く序2.と序3.で、これまでの研究結果と残された課題について述べていく。

序2. これまでの研究結果——レーベンスヒルフェの組織機構の2つの柱

紙幅の都合上、筆者のこれまでの研究成果を全て紹介することはできないため、ここでは本稿に関連の深い、組織機構の2つの柱に限定して述べたい。

(1) 研究者委員会——マールブルク大学教員を中心として

レーベンスヒルフェは、通説では、「親ではない、オランダ人トム・ムッターズが、戦後ドイツの難民の子どもたちの生活を目の当たりにし、義憤にかられて組織した親の会」と言われている。しかし、筆者が2007年及び2008年に実施したアーカイヴ(LA) 調査の結果からは、レーベンスヒルフェの創設者集団のほとんどが、マールブルク大学医学部教授数名を含む、ドイツ人大学教授たちであったことがわかった。1958年のレーベンスヒルフェ創設時には既に、彼らを「研究者委員会」という形で会の組織機構に位置づけることが決定しており、1960年に

正式に発足していた（拙稿 2008）。「親の会」を標榜して立ち上げられたレーベンスヒルフェの、初期の組織機構の中心は大学教授であったのである。研究者委員会は1960年には発足したが、レーベンスヒルフェの組織機構に親委員会が設置されるのは、創設から実に10年後の1968年のことであった。

(2) 各専門委員会——特殊学校拡充策への接近

また、レーベンスヒルフェはその初期から専門職を施設ごと傘下に抱え込んでいた。レーベンスヒルフェが自ら特殊学校や施設を運営し、その職員もレーベンスヒルフェの会員となるという仕組みである。彼らの代表者は、例えば保護作業所委員会など、各種の専門委員会として会の組織機構に組み込まれた。

専門職と親密な関係を築き、傘下に抱え込む戦略には利点があった。当時、知的障害児者の家族向けの支援の選択肢は極めて少なかった。会の内部に専門職がいれば、いつでも親の相談に乗ることができ、速やかに施設やサービスに結びつけることができる。親から新しいニーズが出てきた場合にも自前で即座に応えることが可能になる。また、障害児者のニーズの多様化にも対応しやすい。

しかし、専門職と親密な関係を築くことで、レーベンスヒルフェはその草創期に専門職主義を批判するための仕組みを自ら破綻させてしまったとも言える。1960年代には、レーベンスヒルフェ自ら運営する保護作業所、特殊幼稚園、特殊学校が急増する。レーベンスヒルフェの特殊学校拡充策への接近の背景には、就学義務免除規程により学校教育の場から排除されてきた知的障害児の親の切なる願いがあった。高度経済成長期の西ドイツ社会国家・連邦社会扶助法が親の自発性を意図せず抑制してしまう傾向性が、レーベンスヒルフェにも生じていたと言える。親が何か要望すれば、専門職が何とかしてくれる、という体質がこの時期に形成されるのである（拙稿 2011）。

序3. 本稿の対象と構成

以上、これまでの研究結果を、組織機構の2つの柱に簡単に紹介した。次に、そこで残された課題を整理しつつ、本稿の対象と構成の説明に代える。

(1) マールブルク大学医学部のとの関係

本来ならば序2.の作業と併せて、マールブルク大学医学部・児童精神医学の歴史調査を行うべきであった。ナチと関わりのあったドイツの福祉団体や組織はおしなべて歴史研究者に対して門戸が固く、迂闊にアプローチすると二度と資料を閲覧できなくなるという懸念があったにせよ、である。

2011年2月の現地調査で、ようやく、マールブルク大学年史（1941-1963年分）の入手が実現した。本稿では、この大学年史と、レーベンスヒルフェの創設者集団及び研究者委員会のメンバーを照合し、マールブルク大学医学部とレーベンスヒルフェの創設がいかに結びついていたかを確認したい。これが本稿の第一の主眼となる（1章）。

(2) マールブルク大学と特殊学校教員養成所の設置経緯——レーベンスヒルフェとの人的連続性から

拙稿（2011）では、複数のレーベンスヒルフェの理事らが、レーベンスヒルフェを通して特殊学校の拡充を支持しながら、自らの特殊教育界での影響力を増していくという構造があったことを指摘した。例えば、1960年代にレーベンスヒルフェの理事や研究者委員会委員を歴任するハインツ・バッハ（Heinz Bach）は1960年当時、マインツ大学の補助学校教員養成課程のリーダーの職にあった。1960年代半ばには、マインツ大学に知的障害者教育学（Geistigbehindertenpädagogik）の名を冠した講座がドイツで初めて設立され、バッハはその教授となる。1974年、彼は『特殊教育概説（Sonderpädagogik im Grundriss）』を著すに至る。同書は1970年代後半、教員養成大学特殊教育学科の代表的テキストとなった。また、エバーハルト・ショーンブルク（Eberhard Schomburg, 1904-1987）、ヘルムート・フォン・ブラッケン（Helmut von Bracken, 1899-1984）も、それぞれ、ヘッセン、ニーダーザクセンの特殊学校教員養成課程の長であり、レーベンスヒルフェの理事を歴任する間、特殊教育界での発言力を増していく（EHBSP: S.214-215）。

このように、これまでは視点を全国レベルに置き、レーベンスヒルフェと特殊教育界との関係も全国レベルで考察してきたのであるが、先の(1)の仮説どおり、レーベンスヒルフェの創設がマールブルク大学医学部と分かち難く結びついていたのであるなら、レーベンスヒルフェと特殊学校拡充策との親和性についても、より地域限定的なミクロな考察も必要となる。そこで本稿では、レーベンスヒルフェの創設地であるヘッセン州マールブルクに特に焦点を当て、マールブルク大学の特殊学校教員養成課程の設置経緯を、レーベンスヒルフェとの人的連続性の観点から考察する（2章）。

では、本論に入る。本稿はレーベンスヒルフェ創設の1958年を中心に1950年代を扱うが、必要に応じてその他の年代にも言及する。

1章 マールブルク大学医学部とレーベンスヒルフェの関わり

この章では、マールブルク大学年史と、レーベンスヒルフェの創設者集団及び研究者委員会のメンバーを照合し、マールブルク大学医学部とレーベンスヒルフェの創設がいかに結びついていたかを確認する。

1-1. 創設者集団との人的連続性

1958年11月23日、マールブルク大学病院児童・青少年精神科の図書室に、親や専門職等15名の人々が集まった。そして、「多くの他の国々で行なわれている同様の努力に倣い、知的障害者の親や友人の会をドイツでも結成するという必要性について話し合った」（BVLH GBK

1959-1960: S.1).

このとき集められた15名は、レーベンスヒルフェ内部で「創設者集団」(Gründerkreis) と呼ばれ、その大半が理事ないしは委員会の構成メンバーとなり、後年に至るまで影響力を行使し続けることになる。彼らの顔ぶれは以下の通りである。

創設者集団一覧

1. ベルト・ハイネン (Amtsgerichtsrat Bert Heinen, 1908-1985) : 判事
2. グレーテ・ハイネン (Frau Grete Heinen, 生没年不明) : ベルト・ハイネンの妻
3. エミリー・ノイマン (Frau Emilie Neumann, 生没年不明) : 小児科医⁶⁾
4. ヴェルナー・ヴィリンガー (Prof. Dr. med. Werner Villinger, 1887-1961) : マールブルク大学医学部教授 (精神医学)・医学博士
5. ベレンデス (Prof. Dr. med. ...Berendes, 生没年不明) : マールブルク大学病院耳科教授・医学博士
6. ベレンデス (Frau...Berendes, 生没年不明) : ベレンデス氏の妻
7. リヒャルト・ミッテルマイアー (Prof. Dr. med. Richard Mittermeier, 1897-1983) : マールブルク大学病院耳鼻咽喉科長・医学博士
8. ルイーゼ・ミッテルマイアー (Frau Luise Mittermaier, 1900-1974) : リヒャルト・ミッテルマイアーの妻, 主婦
9. ゲルダ・ミッテルマイアー (Gerda Mittermeier, 1935-) : 大学生 (当時), 小児科医 (現在), ミッテルマイアー夫妻の娘 (推定)
10. エラ・グレフィン・イグナチウ (Ella Gräfin Ignatiew, 生没年不明) :
11. シュッツ (Dr. rer. nat. ...Schütz, Chem ?-1988) : 理学博士 (化学)
12. マリー・グレーテ・シュッツ (Frau Marie Grete Schütz, 生没年不明) :
13. ハランク (Min. -Dir. a. D. Dr. ...Halank, 生没年不明) : 元省庁局長・博士
14. トム・ムッターズ (Tom Mutters, 1917-) : 教師
15. ヘルマン・シュトゥッテ (Prof. Dr. med. Herrmann Stutte, 1909-1982) : マールブルク大学医学部教授 (児童青少年精神医学)・医学博士

(LA LGPB 1 1998: S.1, LA LGPB 4 1958: S.1-2, BVLH GBK 1959-1960, 拙稿 2006, Chronik 1954-1958) (生没年・職業等は1998年11月27日現在) (下線は筆者による)

創設者集団15名のうち、約半数の7名が、マールブルク大学医学部教授ならびにその家族によって占められているのである (下線参照)。また、医師でない人物たちも, "Dr."の肩書きを持つ者が圧倒的に多い。この中には、ミッテルマイアーやハイネンのように、社会的地位が高く、かつ自身も知的障害児の父である、という者もいる。しかし、少なくともこの15名の顔ぶれからは「ごく普通の家庭の親」という印象は受けない。この15名の「創設者集団」の中からミッテルマイアー及びハイネンが理事長 (Vorsitzender) に選出され、ムッターズが書記に就任している。

マールブルク大学年史の「大学病院耳鼻咽喉科」の項目には以下の記述がある。ミッテルマ

イアーは、1955年に当科の科長になった。1956年には、フランクフルト大学病院耳鼻咽喉科医学講座の教授となった（Chronik 1954-1958: S.159）。ベレンデスは1957年に同講座の長になった。それ以前は、マンハイム市立医療施設の施設長及び耳鼻咽喉科の主任医師（Chefarzt）を歴任し、1939年よりハイデルベルク大学の非常勤講師を務め、後に教授となっている（ibid. S.159）。

精神医学界の超大御所で、マールブルク大学精神・神経学正教授であったヴィリンガー⁷⁾と、彼の腹心の部下であり、同じく精神医学博士のシュトゥッテ⁸⁾については拙稿で既に扱っているため、彼らとマールブルク大学の深い関わりについては初見でないが、ここでは大学年史の記述を簡単に紹介しておこう。ヴィリンガーはマールブルク大学の精神・神経科病院（Psychiatrische und Nerven-Klinik）の院長を務めた後、1955/56年にはマールブルク大学学長になった（ibid. S.145）。またシュトゥッテは、1946年から1955年7月31日まで、マールブルク大学精神・神経科病院の主任医師を務め、また1954年11月1日のマールブルク大学児童・精神医学講座（Lehrstuhl der Kinder- und Jugendpsychiatrie）の新設に尽力し、その正教授となった（ibid. S.145, Chronik 1958-1963: S.267, ibid.: S.276）。

なお、この大学病院児童・青少年精神科の図書室で開催された1958年11月23日のレーベンスヒルフェ創設集会では、ヴィリンガーが歓迎の挨拶を行なっている（LA LGPB 4 1958: S.1）。また、会則の草案は、シュトゥッテとムッターズによって作成された（BVLH GBK 1959-1960: S.1）。

即ち、場所の確保から会則作成に至るまで、レーベンスヒルフェ創設の背景には、ヴィリンガー、シュトゥッテを中心とするマールブルク大学医学部教授らの多大なるイニシアチヴがあったのである。

1-2. 研究者委員会との人的連続性

次に、レーベンスヒルフェの研究者委員会とマールブルク大学年史を照合する。

1959年の時点で、レーベンスヒルフェは研究者委員会（wissenschaftlicher Beirat）及び各専門委員会（Fachausschüsse）の設置を既に構想していた⁹⁾。設置予定の研究者委員会の最初のメンバーには、創設者集団のヴィリンガー、シュトゥッテ、シャーデ（Wilhelm Schade）が選出された（BVLH GBK 1959-1960: S.1）。また研究者委員会には、特別な問題への取り組み等のため、各種の専門委員会を作ることが課された（ibid. S.4）。

実際、創設後の数年の間に、レーベンスヒルフェ内部にはさまざまな委員会が設置されていくことになるが、創設時にまず着手されたのは研究者委員会と、保護作業所をはじめとする各種専門委員会の設置であり、親委員会の設置ではなかったのである。親委員会（Elternbeirat）が設置されるのは、創設から実に10年後の1968年9月14日のことであった（BVLH GBK 1968-1971: S.6）。1962年から1965年までの研究者委員会メンバーは以下の通りである。

ハインツ・バッハ学術博士 (Dr. phil. H. Bach) / ベンホルト・トムゼン教授・医学博士 (Prof. Dr. med. Bennholdt-Thomsen) / ビッケル教授・医学博士 (Prof. Dr. med. Bickel), C. ボンディ教授・学術博士 (Prof. Dr. phil. C. Bondy) / H. v. ブラッケン教授・医学博士・学術博士 (Prof. Dr. med. Dr. phil. H. v. Bracken) / プーゼマン教授・学術博士 (Prof. Dr. phil. H. Busemann) / ハーバウアー講師・医学博士 (Dozent Dr. med. H. Harbauer) / H. ヘッツァー教授・学術博士 (Prof. Dr. phil. H. Hetzer) / U. ケットゲン教授・医学博士 (Prof. Dr. med. U. Köttgen) / グスタフ・レーゼマン (G. Lesemann) / K. リュッケン教授・法学博士・政治学博士 (Prof. Dr. jur. Dr. rer. pol. K. Lücken) / E. シェーンヘール講師・医学博士 (Dozent Dr. med. E. Schönhaerl) / ショーンブルク (Prof. Dr. phil. E. Schomburg) / G. シュターク医学博士 (Dr. med. G. Starke) / F. v. シュトッケート教授・医学博士 (Prof. Dr. med. F. v. Stockert) / シュトゥッテ (Prof. Dr. med. H. Stutte) (BVLH GBK 1962-1965: S.2) (下線は引用者による)

ハーバウアーは、1961年1月19日にケルン大学からマールブルク大学へ任期付教授として赴任し (Umhabilitation), 医学部児童精神医学の主任医師に1961年12月1日付で就任した人物である。1963年9月1日には臨時教授から正教授になる (Chronik 1958-1963: S.276)。

ビッケルについては、アーカイヴ(LA) 資料上ではファーストネームが不明なため断定はできないが、マールブルク大学年史1954-1958年の巻の大学病院小児科の項目と、1958-1963年の巻の大学病院小児・外来の項目に「H. ビッケル」という人物が登場する。彼は1955年3月1日より小児科の主任医師を務め、1955年5月11日付で任期付教授 (Umhabilitation) となった (Chronik 1954-58. S.138)。1961年2月24日にはマールブルク大学病院小児・外来の員外教授 (außerplanmäßiger Professor) に就任している (Chronik 1958-1963: S.257)。

リュッケンは医学部教授ではないが、大学病院精神・神経科内の、医学教育青少年援助研究所 (Institut für ärztlich-pädagogische Jugendhilfe) の項目に登場する。彼は、所属を問わずあらゆる聴講者及び社会教育実践に従事する者を対象とした、社会教育 (Sozialpädagogik) に関する現代的なテーマを扱ったセミナーをいくつも開講していた (Chronik 1958-1963: S.283)。

つまり、マールブルク大学医学部とレーベンスヒルフェの関わりはその草創期から深く、医学部教授らはその組織機構にも強固に組み込まれていたのである。

1-3. 小括

レーベンスヒルフェ並びにムッタースは、創設時から現在に至るまで一貫してレーベンスヒルフェの国際性を強調し続けてきた。実際、「オランダ人の手により難民支援の取り組みの中から誕生した親の会」という通説は、レーベンスヒルフェが創設の当初から国際的な組織であったかのようなイメージを我々に与える。しかしながら1-1.の内容からは、「アメリカの知的障害親の会NARC (現ARC) に倣い、ドイツでも同様の会を立ち上げようとの目的から出発した」(拙稿 2011: pp.62-63) レーベンスヒルフェの創設者集団の15名の顔ぶれがドイツ人医師・医

学部教授中心であったという、筆者のこれまでの研究結果がさらに裏付けられた。またそのほとんどがマールブルク大学の医学部教授であったことも確認された。

ヴィリンガーとシュトゥッテの役割の確認はほぼ拙稿の再掲にとどまったが、創設者集団に関して、ミッテルマイアー、ベレンデスの所属を確認できた意義は大きい。なかでもミッテルマイアーは、ヴィリンガー及びシュトゥッテと並び、レーベンスヒルフェ創設のキーパーソンであったことを示す記録が存在しており、創設史を紐解くうえで避けて通れない人物である¹⁰⁾。

また、研究者委員会についても、マールブルク大学医学部教授や、医学部と関わりの深い教授たちで構成されていることが明らかとなった。なお、実はマールブルク大学医学部とマールブルクの特殊学校教員養成もまた深く関係しているのであるが、これについては次章で述べる。

2章 マールブルク大学と特殊学校教員養成課程の設置

1章では、通説とは異なり、レーベンスヒルフェが大学教授、とりわけマールブルク大学医学部教授をはじめ社会的ステータスの高いドイツ人を中心に立ち上げられたことを確認した。この章では、マールブルク大学の特殊学校教員養成課程の設置経緯を、主にレーベンスヒルフェとの人脈的連続性の観点から考察する。

なお、本章は多くをシュトロマイヤー（1967）「マールブルクのペスタロッツ学校の歴史（1920 - 1967年）」¹¹⁾に依拠している。マールブルク大学特殊学校教員養成所の学生であった彼女が課題レポートとして著したもので、歴史的な出来事が時系列で丹念に述べられており、考察はほとんどと言っていいほど、無い。が、だからこそ史資料として使いやすいということがある。さらに特筆すべきは、このレポートには時期区分がない。ヴァイマル期－ナチ期－第二次世界大戦後という、ドイツ史に典型的な時期区分を、この1960年代後半のこの著者はまださほど強固には内面化していない。1920年から1967年までの歴史が一続きに描かれているのである。

そもそも、ドイツの障害児教育・福祉の歴史を通史的に検討した研究は、英語圏はもとよりドイツ語圏においてさえ見当たらない。なぜなら、戦前から障害児教育に従事していた補助学校¹²⁾関係者が戦後の知的障害福祉実践にどのように関わったのか、ということがほとんど議論の対象とされなかったからである。大半の補助学校関係者が、ナチの諸政策に協力していた。それゆえ、戦後しばらくは補助学校関係者が当事者と親の問題を公に表舞台に出すことはなく、また自らが関わった知的障害福祉実践活動を戦前からの流れの中に位置づけて論じることも忌避した。「戦前から学ぶ」とのレトリックを用いる場合は、いつもヴァイマル期に限定された。

それゆえ、1920年から1967年代までを通史で、しかも戦後期を子細に扱ったこのレポートは、先行研究上の空白を鑑みても大変貴重な資料と言えるのである。

2-1. 特殊学校教員養成へのニーズの逼迫と養成課程——ヘッセン州マールブルクの場合

第二次世界大戦後の西ドイツの教育現場では、然るべき教材、授業を行なえるような教室、

人員その他、何もかもが欠乏していた。終戦直後、ドイツの大半の都市において、学校関係の建物の実に80%以上が破壊されていたという (Schomburg 1963: S.96)。

とりわけ人員不足の問題は、他の教育領域に比しても極めて深刻であった。ナチ時代には特殊教育の教員養成が全く行なわれなかったため、戦後の特殊学級・特殊学校の第一線にいたのは「年輩で」「女性の」「専門教育を受けていない」者たち (Ellger-Rüttgardt 2008: S.298) であった。

ヘッセン州も例外ではなく、1948年にフランクフルト／マインで、短期の教員養成課程がヘッセン州常設文部省によって実施された (Strohmeyer 1967: S.34)。これは現職の教員が参加できるような、土曜の夜や休暇を利用して単位を取得する形態の課程であった。1950年から1952年の間には、2年間の養成課程が実施され、マールブルクからも2名の女性教員が参加した。マールブルクの特殊学校、ペスタロッツ学校 (PestaroZZische Schule) はギーゼン、マールブルク、コーバハ3地区の授業見学実施校 (Hospitationsschule)¹³⁾を担い、見学学生の管理はルツケ (Lüdtkke) 校長が務めた。

しかしながら、フランクフルト／マインのこの教員養成課程は前進しなかった。特殊学校教員連盟は、「特殊学校の教員養成の最上の形態は、4セメスター制の大学教員によってしか実現されるべきでない」という見解をとっていたのである。そこでルツケ校長は、マールブルク大学の教授たちに採りを入れ、マールブルク大学が上述の特殊学校教員連盟の見解の促進を支援する用意があるかどうかを打診する。これに応答したのが、ヴィリンガー、シュトゥッテ、デュッカー (Dücker) の3名であった。

ヴィリンガーとシュトゥッテは、マールブルク大学における特殊学校教員養成の問題に関する非公開の報告書をまとめ、州の常設文部省に提出した。それを受けての話し合いの末、1954年にマールブルク大学で特殊学校教員養成所 (Sonderschulpädagogisches Institut) が設置されるに至る (ibid. S.34)。初代所長をシャーデが務めた後、後任にはフォン・ブラッケンが招聘された。

これに関して、シュトロマイヤー (1967) は「フォン・ブラッケンの主たる使命は、同養成所を拡充し、かつマールブルク大学に統合することであった」「特に後者の使命は容易ではなかったが、フォン・ブラッケンにより、1963年に初めてようやく実現された」¹⁴⁾と説明している (S.35)。1954年に既にマールブルク大学に養成課程が設置されているのに、その後も「大学への統合を目指す」というこのくだりはわかりにくいだが、つまりは、特殊で専門的・試験的な試みの養成コースを大学に間借りして実施させてもらうのではなく、大学の組織機構そのものにこの養成所 (Institut) を正式に統合するということであろう。実際、マールブルク大学年史を確認しても、1947年から1958年までの巻にはこの養成所に関する記述は出てこない。1958-1967年の巻に、「特殊学校教員養成所 (Institut für Sonderschulpädagogik)」として初めて登場する¹⁵⁾ (Chronik 1958-1963: S.519)。

その間、この養成所とペスタロッツ学校の間には密な協働関係が生じ、その後も継続した。

ペスタロッツ学校はこの養成所の授業見学実施校、教育実習実施校（Praktikantenschule）、実験学校（Versuchsschule）¹⁶⁾の役割を積極的に担った（Strohmeyer 1967: S.35）。

もっとも、同養成所とペスタロッツ学校の間には密な協働関係があったが、ペスタロッツ学校が授業見学や教育実習の実施校として理想的環境であったというわけではない。ペスタロッツ学校には、十分な教室や教材もなかった。「生物学、物理学、化学は、絵や写真以外の実践的な教材が何もなく」 という（ibid. S.36）。第二次世界大戦で壊滅的な打撃を受け、「ゼロ時」「崩壊社会」「瓦礫の時代」と形容されたドイツの戦後復興がようやく落ち着くのは1960年代前半頃だから、1950年代後半ではまだ試行錯誤の連続であったことは想像に難くない。当然、場所の確保からして容易ではなかったため、古くなって使われなくなった病院や施設、既存の大学などに間借りしての取り組みというのは、この時期決して珍しくはなかった。

むしろ、こうした間借りの形態は、教員養成に理想的な環境とは見做されなかった。ペスタロッツ学校のルツケ校長は、「ペスタロッツ学校で現在実施されている養成課程のすべてのカリキュラムは、将来、最適に組織された専門施設（Werkstätte）で実施されるだろう」との見解を示し、「ペスタロッツ学校を養成課程のカリキュラム実施に最適な形に整えること、そして同校が集中的に活用されることを望んだ」のである（ibid. S.36）。

2-2. 小括

以上、マールブルク大学の特殊学校教員養成課程の変遷、とりわけこの課程が特殊学校教員養成所としてマールブルク大学に統合される経緯を辿った。本稿2-1.内の下線付きの人名は、先に1-2.で扱ったレーベンスヒルフェ研究者委員会のメンバーである。また、先の節では触れられなかったが、マールブルク大学年史1958-1963年の巻には、同養成所の教員として、マールブルク大学病院児童・精神科のシュトゥッテ、ヴァインシェンク（Weinschenk）、ハーバウアー、ヴェーバー（Weber）の4名が兼務していた旨が記されている（Chronik 1958-1963: S.276）。

これらの内容を、1章にも遡及して考察すれば、およそ次のようにまとめられよう。

ナチ期、第二次世界大戦を経験した西ドイツでは、特殊学校教員養成のニーズが逼迫していた。ヘッセン州常設文部省は1948年、フランクフルト／マインを拠点に教員養成に着手する。1954年にはマールブルク大学に特殊学校教員養成所が設置され、このとき中心となったのがヴィリンガーとシュトゥッテであった。マールブルク大学医学部教授を媒介として人・物・金、とりわけ人的資源が効率的に調達され、レーベンスヒルフェはその初期から連邦扶助法を視野に入れた綿密な会則と体系的な組織機構とを備えることに成功したと考えられる。

表1.は、主に本稿と大学年史を基に作成した年表である。レーベンスヒルフェが、その草創期からマールブルク大学特殊学校教員養成所と、少なくとも人的な面で強固に連続していることが一目瞭然であろう。そして、その結びつきに、とりわけ場所や人的資源の提供という面で多大なる貢献をしたのは、他ならぬマールブルク大学医学部であったのである。

表 1. 特殊学校教員養成に関わる動きとレーベンスヒルフェに関する年表

年	特殊学校教員養成	年	レーベンスヒルフェ
W.W.II 直後	・特殊学校教員養成のニーズ逼迫		
1948	・ヘッセン州、短期の特殊学校教員養成課程を設置（フランクフルト/マイン） ・ペスタロッツ学校（マールブルク）、ヘッセン州3地区の授業見学実施校を担当		
1952	・ヘッセン州の短期養成課程終了 ・ショーンブルク、ニーダーザクセン治療教育教員養成所所長	1952	・ムッターズ、ヘッセン州フィリップス病院に赴任
1952/53 (推定)	・ペスタロッツ学校のルツケ校長が、 <u>ヴィリンガー</u> 、 <u>シュトゥット</u> 、 <u>デュッカー</u> （3者ともマールブルク大学教授）にマールブルク大学での教員養成打診		
1954	・マールブルク大学で特殊学校教員養成所設置（初代所長： <u>シャーデ</u> 後任： <u>フォン・ブラッケン</u> ）	1950 年代 半ば	・ムッターズ、行き場のない子どものためのホーム「シャスティン・ハイム」設立
		1957 頃	・ミッテルマイアー夫人（ダウン症のある青年の母）、 <u>ヴィリンガー</u> と <u>シュトゥット</u> に、息子の補助学校卒業後の行き場について相談 ・ムッターズ、マンチェスター及びアメリカの親の会と接触
1958- 1963	・ <u>リュッケン</u> 、マールブルク大学医学教育青少年援助研究所で社会教育従事者向けセミナー実施 ・ <u>ハーバウアー</u> 、 <u>シュトゥット</u> 、 <u>ヴァインシェンク</u> 、 <u>ヴェーバー</u> 、マールブルク大学特殊学校教員養成所教員を兼務	1958 10月 11月	・ <u>ショーンブルク</u> 訪英、英親の会と接触 ・レーベンスヒルフェ設立（創設者集団： <u>ヴィリンガー</u> 、 <u>ミッテルマイアー</u> 、ムッターズ、 <u>シュトゥット</u> 、 <u>ハイネン</u> 、他10名）（理事： <u>ミッテルマイアー</u> 、 <u>ハイネン</u> ） <u>ヴィリンガー</u> が開会の挨拶、 <u>シュトゥット</u> とムッターズが会則作成
1960	<u>バッハ</u> 、マインツ大学補助学校教員養成課程の長	1959	・研究者委員会発足（ <u>ヴィリンガー</u> 、 <u>シュトゥット</u> 、 <u>シャーデ</u> ）
1963	・上記養成所、マールブルク大学の機構に正式統合（ <u>フォン・ブラッケン</u> の功績）	1962	・研究者委員会（ <u>ハーバウアー</u> 、 <u>リュッケン</u> 、 <u>シュトゥット</u> 、 <u>ビッケル</u> 、 <u>バッハ</u> 、 <u>レーゼマン</u> 、 <u>フォン・ブラッケン</u> 、 <u>ショーンブルク</u> 、他8名） ・理事（ <u>ミッテルマイアー</u> 、 <u>ハイネン</u> 、他5名）

（Strohmeyer 1967, 拙稿 2008, 拙稿 2011 並びに本稿を基に筆者作成）（下線は人名，うちゴシック太字はマールブルク大学教授）

まとめ

当時、知的障害のある子どもの親の願いは切実であった¹⁷⁾。また、親の間では「子どもの障害に合った学校・施設を作ってほしい」との発想が圧倒的主流であった¹⁸⁾。通説とは異なり、レーベンスヒルフェは特殊教育界の主導する特殊学校拡充策と親和的に動いていたが、これは必ずしも大学教授を中心とする理事・委員らの独断や暴走ではない。このことは強く付言しておかねばなるまい。

当事者団体が、大学教授等、学識者の能力を活用することは、ドイツだけに特有の現象ではなく、例えばイギリスの親の会にもあった。大学教授を中心とする理事構成には、組織規模の拡大という面では大きな利点がある。素人の親が手探りで試行錯誤するより、大学教授をはじめとする社会的ステータスの高い人物らがイニシアチヴを取るほうが、組織の整備・拡充・運営という側面から見ればはるかに効率がよい。そのことは理事たちと一般の親たちの共通認識であったと思われる¹⁹⁾。

レーベンスヒルフェの矛盾——即ち、「親の会」を標榜し、ノーマライゼーションの担い手として自らを宣伝しつつ、内実では研究者・専門職中心の組織機構を整備し学校施設を志向していくという性格——は、本稿で明らかとなったレーベンスヒルフェと特殊学校教員養成課程関係者との強固な人的連続性を見れば、当然の結果であったと言える。特殊教育界主導のセグリゲーション施策を、レーベンスヒルフェが側面から支持していく構造の素地は、レーベンスヒルフェの草創期に既にできていたのである。

最後に、2011年2月に筆者が行った、元レーベンスヒルフェ職員へのインタビューの一部を紹介し、本稿を終える。

「1982～1983年頃に、私はインテグレーション小学校（Integrative Grundschule）を作ろうと試みたが、上層部が承諾しなかった。上層部とは、バイエルン州レーベンスヒルフェの理事（Bayern Landesverband Vorstand）のことだ。承諾しなかった理由は、当時、この理事が特殊学校教員であったからである。（何故、理事が特殊学校教員だと、インテグレーション教育が進まなかったかというと、）インテグレーション教育が進展すると、特殊学校教員は自分たちの働く場所が減る・失われると危惧したのだ。インテグレーション小学校に特殊学校教員という専門職は必要であるにもかかわらず、特殊学校教員はインテグレーション教育を自らの領域を脅かすものと考え、強く反発した」²⁰⁾ 元レーベンスヒルフェ・X市²¹⁾支部長A氏（仮名）へのインタビュー。2011年2月26日（土）11:00 a.m. - 12:00 p.m. A氏の自宅にて実施。括弧は筆者による補足。

注

- 1) 創設時の名称は "Lebenshilfe für das geistig behinderte Kind" で、現名称は "Bundesvereinigung Lebenshilfe für Menschen mit geistiger Behinderung" である。直訳すれば、それぞれ「知的障害児生活援助」「全国知的障害のある人々のための生活援助連盟」となる。中村/荒川 (2003) では後者に「連邦精神遅滞者生活援助連盟」という訳語があてられている (中村/荒川 2003: p.78)。藤井 (1993) は、創設時の名称を「精神遅滞児生活援助連盟」と訳し、その他の箇所では単に "Lebenshilfe" と原語のまま表記している (藤井 1993: p.59)。なお、ドイツ特殊教育の戦後史に通暁する藤井聰尚氏からは、レーベンスヒルフェは「親・市民・専門職の三者の会」であり、「親の会とは言えないのではないか」というご指摘をいただいたことがある。たしかにレーベンスヒルフェは、いわゆる親の当事者団体のイメージとは異なっており、日本の「手をつなぐ育成会」と「日本知的障害者福祉協会 (旧日本精神薄弱児愛護協会)」を足して割ったような性格の団体である。しかし、本稿では基本的な訳語は変更せず、' ' を追加して「ドイツ知的障害『親の会』レーベンスヒルフェ」とするにとどめる。理由を以下に記す。

ドイツの代表的な福祉関連テキストにおいて、レーベンスヒルフェは「親の会」や「親のイニシアチヴ (=Elterninitiative)」などと紹介されることが多い (s. Möckel [1988]2007: S.24, Ellger-Rüttgardt 2008: S.304)。これはレーベンスヒルフェ自身が「アメリカやイギリス、オランダの親の会 (parental association) に相当するものをドイツでも作るために立ち上がった」と自己宣伝してきたことに起因している。レーベンスヒルフェは、家族会・当事者団体・専門職団体など様々な機能を備えているが、その活動の中心は「親」であり、また自らも「親の会」であるとして、その創設から1970年代に至るまで自負してきた。現在でも、この団体が主に親の会であるという認識を持つ各国有成会は少なくない。国際育成会会議でドイツ代表として出てくるのもこのレーベンスヒルフェである。

以上のような理由から、論点を明確に示すためにも、これまで拙稿では ' ' 付きで親の会という表現を用いてきた。本稿もこれに倣う。なお、現在の正式名称が「知的障害のある人々」という表現を用いていることをふまえて、「知的障害者親の会」「知的障害児者親の会」と訳すことは避けている。

- 2) 1960年代、ドイツは特殊学校の歯止めなき整備・拡大と特殊学校教員養成課程の設置ブームという、特殊教育制度の黄金期を迎える。1960年から1970年の間に、特殊学校 (Sonderschule) 数は1106から2381に急増する。1970年から1980年の間は500増にとどまり、80年代には200ほど減少に転じる (BMBF 2005: S.50)。
- 3) 博士学位論文 (2011)「ドイツ知的障害『親の会』レーベンスヒルフェの成立史研究」首都大学東京。
- 4) ドイツには民間福祉団体の登記社团 (Eingetragene Vereine) 制度が存在する。ドイツ民法は「営利事業を目的としない社团は、…社团登記簿に登録することにより、権利能力を有する」(21条)と規定しており、登記を行うことで法人格 (権利能力) が認められる (石村 1997: p.48, Anheier/ Seibel 1997: pp.142-143, Esche/ Huber 1991: S.158-168)。
- 5) AUF: http://www.lebenshilfe.de/wDeutsch/ueber_uns/index.php. Zugriff: 26.Okt.2010.
- 6) 彼女に関しては、マールブルク大学病院の医師であったか否かは確認できていない。
- 7) ヴェルナー・ヴィリンガー (Werner Villinger, 1887-1961)。戦中はブレスラウ大学の精神病理学教授。ナチ障害者安楽死計画 (T-4) 専門家の一員。チュービンゲン大学、ペーテル障害者施設に勤務後、1946年から1956年までマールブルク大学正教授。1950年にはホワイトハウス児童・

青少年会議に参加。1961年、山中で転落死。裁判を逃れるための自殺であったとも言われているが、真相は明らかでない（s. Gallagher 1995, Holtkamp 2002）。

- 8) ヘルマン・シュトゥッテ（Hermann Stutte, 1909-1982）。ボン、フランクフルト、ギーセンで医学を含む複数の学位を修める。1934年からテュービンゲン及びギーセンにおいて、優生学の裁判手続きの不妊手術申請を担当する。1935年にはギーセンで博士号取得。ギーセン以降は、テュービンゲン大学病院でH. F. ホフマン教授のもとで働く。そこでは、高度な教育を受けた神経学・精神医学の専門医として独立の児童科を任された。戦後少しして、シュトゥッテはマルブルク大学病院児童・精神科の長になり、1954年には西ドイツで初めて児童・青少年精神医学講座の正教授となった。ここでヴィリンガーと密に仕事をした。
- 9) これについては拙稿（2011）に詳しい。
- 10) 「ミッテルマイアー夫妻には、ダウン症の息子（1957年当時17歳）がいた。当時、補助学校卒業生の選択肢はごく僅かであったが、母親であるルイーゼ（Luise Mittermaier）は息子を施設に入れたくないと考えていた。そこで彼女は、シュトゥッテとヴィリンガーに相談を持ちかける（LA TMO 1 1985: S.3）。ヴィリンガーとシュトゥッテは、彼女とムッターズを引き合わせるとともに、ドイツで親の手による援助連盟を設立するという提案をした。ルイーゼはこのアイデアに感激し、同じ境遇の母親を探すため新聞広告を出した」（拙稿2008より、一部改変）。
- 11) Strohmeyer, Sibylle (1967): Zur Geschichte der Marburger Pestalozzischule (1920-1967). Wissenschaftliche Hausarbeit zur Staatsprüfung für das Lehramt an Sonderschulen. Institut für Sonderschulpädagogik der Philipps-Universität Marburg/ Lahn. 藤井聰尚教授（中部大学）より資料提供。
- 12) 補助学校（Hilfsschule）。通常の学校で読み・書き・算についていけない子どものための学校だが、なかには精神薄弱児もいた。

ドイツでは他国に比べて早期に義務教育制度が整備されていたため、学業不振児問題の顕在化も早く、1880年代には民衆学校の下請け機関として補助学校が登場し、20世紀初頭にかけて瞬く間に普及する。補助学校の生徒は、単に家業の手伝い等をさせられているために学習が遅れている子どもから、精神薄弱児、行動障害児に至るまで、実にさまざまであった。
- 13) ここでいう授業見学とは、教員養成課程に在籍中の学生が実際の授業を見学することをいう。養成課程のカリキュラムの一環である。
- 14) Erlaß des Hessischen Kultusministers vom 6.5.1963; Strohmeyer 1967: S.35.
- 15) 残念ながらこの項目の該当ページには「特殊学校教員養成所の報告書は締め切りに間に合わず」との記載が一行あるのみである（Chronik 1958-1963: S.519）。年史の目次では、この研究所は「学部（Einrichtungen der Fakultäten）」「大学の各学術研究所（Forschungsinstituten an der Universität）」といった大項目と同格に記載されており、既存の学部学科機構とは別枠であったことがわかる。
- 16) 現在では“Laborschule”とも呼ばれる。実際に子どもに対して授業を行いながら、教育学的な研究実験や教員養成の実地等が行われる。
- 17) ナチ障害者安楽死政策の影響により、第二次世界大戦後のドイツにおける知的障害児者の総数は少なく、集団としての規模が小さかったことに加え、彼らを価値の劣った存在と見做す風潮もあって、知的障害児者のための福祉・教育制度の戦後整備は立ち遅れた。戦後のドイツにおいて、学齢の知的障害児のための教育的支援はほぼ皆無であった。1945年以降の特殊教育制度は、それ以前の制度と同様の法的欠陥、即ち、精神薄弱児の「教育可能児／教育不可能児」という腑分け

(Ellger-Rüttgardt [1997]2006: S.279, Möckel [1988]2007) を残存させており、知的障害児は学校教育の場から排除されていた。

- 18) 藤井 (1993) に詳しい。
- 19) しかし、そうであればこそ、何故レーベンスヒルフェは、かくもムッターズを全面に押し出し、「親の会」としての顔を強調せざるを得なかったのか、と問うことができよう。これについては拙稿 (2011) で、ナチの暗い過去の封印と、新たなドイツ社会国家作りへの歩みという視点から一応の考察を付したが、今後も引き続き解明に取り組んでいく予定である。
- 20) 「組織構造はピラミッドだが、その内実は上意下達ではなく、連邦・州・市・郡レベルの各支部はそれぞれ独自に動いている」という言い回しは、ドイツ民間福祉団体に対してよく使われ、ドイツ福祉従事者の間でも研究者の間でもほぼ定説となっており、レーベンスヒルフェに関してもよく用いられる。けれどもA氏の話からは、既存の枠内でなら自由な活動ができるが、何か全く新しい取り組みをしようとする場合には結局、上の組織の承認が必要、という実情が垣間見える。この点と、A氏へのインタビューの全容については、また稿をあらためて扱いたい。
- 21) バイエレン州某市 (Ort)。

引用文献

- BMBF = Bundesministerium für Bildung und Forschung (Hrsg.)(2005): Grund- und Strukturdaten 2005. 1. Aufl. Bonn, Berlin. S.54
- BVLH GB = Bundesvereinigung Lebenshilfe für geistig Behinderte e.V. (s.a.): Geschäftsbericht 1968-1971. s.l..
- BVLG GBK = Bundesvereinigung Lebenshilfe für das geistig behinderte Kind e.V. (1960): Geschäftsbericht 1959-1960. s.l..
- BVLH GBK (s.a.): Geschäftsbericht und Kassenübersicht 1962-1965. s.l..
- BVLH MGB = Bundesvereinigung Lebenshilfe für Menschen mit geistiger Behinderung e.V. (2008): 50 Jahre Lebenshilfe. Aufbruch - Entwicklung - Zukunft. 1.Aufl. Marburg.
- Chronik 1954-1958 = Philipps-Universität Marburg/Lahn. (s.a.): 15. Oktober 1954 bis 14. Oktober 1958.
- Chronik 1958-1963 = Philipps-Universität Marburg/Lahn. (s.a.): 15. Oktober 1958 bis 14. Oktober 1963.
- EHBSP = Enzyklopädisches Handbuch der Sonderpädagogik
Heese, Gerhard/ Wegener, Hermann (Hrsg.)(1965): EHBSP. 2. Lieferung: Auge-Biologieunterricht. Dritte, völlig neubearbeitete Aufl. Berlin – Charlottenburg: Carl Marhold Verlagsbuchhandlung.
- LA LGPB = Lebenshilfe Archives, Marburg: Lebenshilfe. Gründungsgeschichte, Protokoll, BV-Mitglieder.
- 1 Möckel, Andreas (1998): Ein Brief an die Bundesvereinigung Lebenshilfe e. V.. 27/11/1998.
- 4 Anon. (1958): Protokoll. Über die Gründungsversammlung von "Lebenshilfe für das geistig behinderte Kind" am 23.11.1958 in der Bibliothek der Kinder- und Jugendpsychiatrischen Klinik Marburg/ L.
- Anheier, Helmut K./ Seibel, Wolfgang (1997): Chap. 6 Germany. IN: Salamon, Lester M./ Anheier, Helmut K. (eds.): Defining the nonprofit sector. A cross-national analysis. Manchester University Press, pp.128-168.

- Bach, Heinz (1966): Idee und Gestalt der Sonderschule für geistig behinderte Kinder. IN: Lebenshilfe für das geistig behinderte Kind e. V. (Hrsg.)(1966): Die schulische Förderung des geistig behinderten Kindes. 1. Aufl. Marburg/ Lahn: Oberhessische Presse GmbH (Handbücherei der BVLH GBK Bd.6), S.9-19.
- Ellger-Rüttgardt, Sieglind ([1997]2006): Geschichte der sonderpädagogischen Institutionen. IN: Harney, Klaus/ Krüger, Heinz-Hermann (Hrsg.)([1997]2006): Einführung in die Geschichte von Erziehungswissenschaft und Erziehungswirklichkeit. 3. Aufl. Opladen, Bloomfield Hills: Verlag Barbara Budrich.
- Ellger-Rüttgardt, Sieglind (2008): Geschichte der Sonderpädagogik. 1. Aufl. München: Ernst Reinhardt, GmbH & Co KG, Verlag.
- Esche, Klaus/ Huber, Arno (1991): Der eingetragene Verein (e.V.). IN: Müller, Carl Wolfgang (Hrsg.)(1993): Selbsthilfe. 1. Aufl. Weinheim und Basel: Beltz Verlag.
- Gallagher, Hugh Gregory (1995): By Trust Betrayed. Patients, Physicians, and the License to Kill in the Third Reich. Vandamere Press. (=1995, 長瀬修 訳『ナチスドイツと障害者「安楽死」計画』現代書館.)
- Holtkamp, Martin (2002): Werner Villinger (1887-1961). Die Kintinuität des Minderwertigkeitsgedankens in der Jugend- und Sozialpsychiatrie. 1. Aufl. s.l.: Matthiesen Verlag.
- LA TMO=Lebenshilfe Archives, Marburg: Tom Mutters Ordner.
- 1 Heinen, Bert (1985): Geschichte der Lebenshilfe für geistig Behinderte. Februar/1985, s.l..
- Möckel, Andreas ([1988]2007): Geschichte der Heilpädagogik. 2. völlig überarbeitete Neuaufl. Stuttgart: Clett Cotta Verlag.
- Schomburg, Eberhard (1963): Die Sonderschulen in der Bundesrepublik Deutschland. Geschichte Entwicklung und gegenwärtiger Stand. 1. Aufl. Berlin-Spandau, Neuwied am Rhein: Hermann Luchterhand Verlag GmbH.
- Strohmeyer, Sibylle (1967):Zur Geschichte der Marburger Pestalozzischule (1920-1967). Wissenschaftliche Hausarbeit zur Staatsprüfung für das Lehramt an Sonderschulen. Institut für Sonderschulpädagogik der Philipps-Universität Marburg/ Lahn.
- 藤井聰尚 (1993)『「特殊学校就学義務」政策の研究——ドイツ連邦共和国における問題構造とその性格』多賀出版.
- 石村耕治 (1997)「欧米主要国のNPO法制と税制」『ジュリスト』1105, pp.39-49.
- 松本瑞穂 (2006)「ドイツ知的障害親の会“Lebenshilfe”の創設と展開——難民／発達障害／オランダ人 Tom Mutters の役割」東京都立大学修士学位論文.
- 松本瑞穂 (2008)「ドイツ知的障害親の会"Lebenshilfe"成立前史——Tom Mutters だけが創設の担い手であったのか」『社会福祉学』48巻4号, pp.92-103.
- 松本瑞穂 (2011)「ドイツ知的障害「親の会」レーベンスヒルフェの成立史研究」首都大学東京博士學位論文.
- 中村満紀男/荒川智 編 (2003)『障害児教育の歴史』明石書店.

参考文献

Chronik 1941-1947 = Philipps-Universität Marburg/Lahn (Hrsg.)(1954): Chronik der

Philipps-Universität Marburg. Abril 1941-15. September 1947. Marburg.

Chronik 1947-1950 =Philipps-Universität Marburg/Lahn. (1959): September 1947-15. Oktober 1950.

Chronik 1950-1954 =Philipps-Universität Marburg/Lahn. (1961): 1. Abril 1950-15. Oktober 1954.

Bach, Heinz (1961): Die Ausbildung für das Lehramt an Allgemeinen Sonderschulen (Hilfsschulen) am Heilpädagogischen Institut an der Pädagogischen Hochschule Hannover. IN: Zeitschrift für Heilpädagogik, 7/8/1961, S.379-385.

Bach, Heinz u. a. ([1974]1979): Sonderpädagogik im Grundriß. 6. Aufl. Berlin: Carl Marhold.

Hamel, Gertrud (1978): Zur Geschichte der Sonderschullehrerausbildung in Marburg. Diplomarbeit. Philipps - Universität Marburg, Fachbereich Erziehungswissenschaften.

Herig, Sabine/ Münchmeier, Richard ([2000]2003): Geschichte der Sozialen Arbeit. Eine Einführung. 2. Aufl. Weinheim, München: Juventa.

矢野久 (2001)「連邦共和国—— 1945年～現在」 矢野久/ アンゼラム・ファウスト 編 (2001)『ドイツ社会史』 有斐閣, pp.113-151.

付記

- 1) 本稿は、科学研究費補助金「ドイツ知的障害親の会レーベンスヒルフェの成立史研究：特殊教育制度拡充策との親和性」(研究活動スタート支援, 2010-2011年度, 研究課題番号: 22830070) の成果の一部である。
- 2) 本稿では「精神薄弱」をはじめ、差別的な意味合いを持ち現在では使用されなくなった用語も、当時の意味に即して歴史的用法で用いる。また各用語はその時代に即した意味で用いる。
- 3) 人名には原則、初出時は括弧付きで原語のフルネーム及び生没年を付しているが、不明な者についてはこの限りでない。

(2011.10.4 受稿, 2011.10.24 受理)